高山の文化を高めた人々

No. 69

「父、江黒美胤（よしたね）」

江黒憲子

江黒美胤は、明治三十八年六月、高山市上川原町で江黒家の長男として誕生しました。

父は、幼少の頃は丈夫な子供ではなかったようですが、教育熱心な両親のもと斐太中学を卒業し、岐阜師範学校を経て金山の小学校の教員として赴任しました。不馴れな土地で初めての教員生活はさぞかし大変だっただろうと想像しますが、親切に面倒を見てくれたのが妻となる知津子でした。その後六十年余、穏やかな家庭を築き一女四男の子に恵まれました。

昭和34年、市立第四中学校校長室にて

短歌は、父が斐太中学に入学した大正七年に同校へ赴任された、歌人の松田常憲（つねのり）先生からの指導を受け「有斐」に作品五首が掲載されたことがきっかけとなり始めたようです。教員になってからも、教職の傍ら短歌研究に傾倒していきました。

松田先生は、斐太高校退職後も何度か来高され、父の家にもよく立ち寄られました。その当時、私は江黒家へ嫁いだばかりで、短歌には縁遠い状況でしたが、案内役として市内各所を一緒に廻りました。その道すがら、城山から市街を一望している時に、松田先生の奥様の襟足に桜の木から毛虫が落ちて来て、大騒ぎして払い除けた出来事が懐かしく思い出されます。

父は、母と結婚した昭和五年に鎌手白映氏主宰の「裸形」同人になるなど作歌活動を続け、昭和二十二年には「飛騨短歌会」同人となり、翌年逝去された福田夕咲先生に弔歌を捧げました。また昭和三十二年に、松田先生と同じく短歌結社「水甕社」同人となり、昭和三十五年には、前年逝去された松田先生の歌碑建立に奔走し、城山二の丸公園に完成しました。この歌碑建立には、父をはじめ松田先生の指導を受けられた荒垣秀雄さん、古池信三さん、小林幹さんら十四人の方々が尽力されました。

父は教師として定年を迎えるまで教育一筋に務めましたが、優しくて子どもを叱ることが大嫌いな人でした。孫も一緒の三世代同居の家族でしたが、孫や私たちにうるさいと叱ることもなく、自分が静かな所へ移動するような思い遣りのある優しい父でした。

昭和三十七年、山王小学校校長を最後に教職を退いてからは、創設以来所属していた「飛騨短歌会」で同好の皆様と研鑽を積み、地域婦人会などで指導にあたり、短歌の道一筋に余生を過ごしました。この他、宮村村歌、江名子小学校校歌の作詞、牧野英一遺歌集の編纂なども行い、平成五年に高山市文化功労者顕彰を受賞しました。

松田常憲歌碑

父の生涯を顧みれば、明治、大正、昭和、平成とまさに激動の時代を生き抜き、その時代の中で、生きがいを求め、風情を楽しみ、幽玄な短歌の世界に入り、生命や自然の営みの神秘に触れえたことは、歓びであったと思います。いつも穏やかで、腕白盛りの孫を背負って度々寝かしつけてくれた父の姿が思い出されます。

父は平成十二年五月、九十五歳で永眠しました。絶筆となった歌集「沙羅の樹」の中の短歌から、父の人柄を読み取っていただければ幸いです。

年老ひて日々に無事なり天地（あめつち）の囁くごとく雨の音する

山寺の十一時の鐘はわが一生聞きたりし音ああ今日も鳴る